

木枯らし帰るところなし

志村良知

たのが「統率の外道」、爆弾を抱いた戦闘機の敵空母への体当たり攻撃だった。これで沈めないまでも飛行甲板を破壊し火災を起こして作戦不能にすれば、大和、武蔵を含む艦隊は敵上陸部隊の蝟集するマニラ湾に突入できるであろう。

海に出て木枯らし帰るところなし 山口誓子

俳句でいう切れが無く読む人を不安にさせるこの句は、山口誓子が昭和一九年一月一七日に伊勢で詠んだ。発表は昭和二二年で、作者自身によると生還を期せずに出撃していった特攻隊員を悼んだ一句であるという。しかし、戦史では木枯らしと特攻隊とは場所も季節もそぐわないものである。

戦闘機が爆弾を抱き、最初から敵艦に体当たり攻撃することを意図して出撃する特攻は昭和一九年一〇月末のレイテ沖海戦で開始された。四か月前のマリアナ沖海戦で、敵の新兵器、新戦術で海軍の空母機動部隊の航空隊はワンサイドゲームで搭乗員ごと壊滅させられた。フィリピンと近海の航空優勢は完全に米軍に握られ、空襲で基地航空戦力も大きく削がれ、陸海軍機とも空に浮かぶことは即座の死を意味した。

その中で帝國海軍最後の艦隊決戦「捷一号」作戦が開始された。航空機の護衛のない艦隊行動は自殺でしかない。苦肉の策で編み出され

最初の『神風（しんぷう）特別攻撃隊』は一〇月二二日から二五日に出撃した計一九機。この中の『敷島隊』五機の空母一隻撃沈、一隻撃破、他一隻撃沈という戦果が、必殺必中の体当たり攻撃だったとして一〇月二八日付の海軍布告で発表され、即日ラジオで、翌日新聞で国民に知らされた。しかし、この体当たり攻撃が組織的意図のもとに、さらに継続・拡大されていくことは報道されず、国民も誓子も知る由はなかった。

誓子がフィリピン・マバラカットから出撃していった特攻隊員を伊勢の木枯らしに例えて詠んだこの句は、作者の意図を遙かに越え、終戦までに空と海合計で一四〇〇〇人にも上る「特別攻撃」で散った若者を悼む墓銘碑となった。